

4 古典を扱う授業を行う上での留意点

古典を扱う授業を行う上で、古典に対する生徒の苦手意識を緩和するために留意することが必要と思われる点について、以下に整理する。

ア 「教科書で教える」の発想に立って授業を構想すること

教科書とは、科目における指導事項を指導するための、いわば「素材」である。だから「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」ことが大切である、などと言われる。しかし、古典を扱う授業の場では、文法的な説明や現代語訳に時間を割きすぎるあまりに、「教科書を教える」授業、すなわち、典型的な訓詁注釈の授業に陥ることも少なくない。

古典を読む力を育成するという視点に立てば、もちろん、訓詁注釈の学習は必要である。しかし、「訓詁注釈の学習が必要である」からといって、「古典を扱う学習が常に訓詁注釈の学習で完結してよい」ということにはならない。古典を扱う授業の内容が訓詁注釈に偏りすぎると、豊かな古典の世界に触れる前に、生徒を古典嫌いにしてしまうという結果をもたらしかねないからである。教師は、生徒の実態や指導の時期、指導事項のバランスなどを考慮しながら、「教科書で教える」の発想に立って指導のねらいを吟味しなければならない。

本研究の事例においては、例えば、**事例1**では古語を手掛かりにして文章を読み味わうことを、**事例2**では文章の読み取りを基にして登場人物の心情を考えることを、**事例3**では人物の心情を考えながら読むことを、それぞれねらいとした。「教科書で教える」の発想に立つと、指導のねらいは明確になる。指導のねらいが明確になると、「授業では何を中心にして指導するのか」、「授業では何を評価するのか」、さらには「授業ではどのような言語活動を取り入れるのがよいのか」などという、授業を構想する上で欠かせない要素の検討が進む。

古典を扱う授業においては、近代以降の文章を扱う授業と同様に、「教科書で教える」という発想に立って授業を構想することが求められる。そして、授業においては、文章の表面的な意味をとらえることだけで終わりとせず、文章を素材として、科目における指導事項を言語活動を通して指導していくことで、科目がねらいとする言語能力や資質を育成していくことが求められる。このことに関して、新学習指導要領解説国語編「国語総合」で次のように示されている。

〈C 読むこと (1) 指導事項 の解説部分より抜粋〉

古典の学習は、古文、漢文の現代語訳や文法的な説明に終始するものであってはならない。古典を読むことへの意欲を喚起するためには、古典を学ぶことの意義を認識させることが大切である。そのためにも、近代以降の文章と同様に、表現の仕方に注意したり、要約や詳述をしたり、想像力をはたらかせたりしながら読み味わい、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしていくことが大切である。このような学習を通して、我が国の伝統的な言語文化に対する生徒の興味・関心が広がり、外国の言語文化を理解する心も養われていく。(下線は稿者による)

「国語総合」の土台の上に展開していく「古典A」や「古典B」においても同様に、教科書を素材として、科目における指導事項を言語活動を通して指導していくことで、科目がねらいとする言語能力や資質を育成していくことが求められる。

なお、「国語総合」、「古典A」、「古典B」の科目の目標や指導事項等については、第5章の(1)にまとめた。

イ 言語活動を通して、科目における指導事項を指導すること

古典を扱う授業では読むことの学習が中心になり、主として読む活動が行われる。しかし、読む能力は読む活動だけでは十分に身に付かない。話したり、聞いたり、書いたりする言語活動を通して指導することで、より効果的に読む能力をはぐくむことができる。

また、様々な言語活動を通して指導事項を指導していくことは、それが生徒の主体的な学習につながることから、授業改善のための手立てともなる。さらに、生徒同士による学び合いといった言語活動の場面では、生徒が達成感や成就感を感じやすいことから、生徒の学習意欲が喚起されることも期待できる。

本研究の事例では、読む学習の一環として話し合いによる言語活動が取り入れられている。どの事例からも、生徒同士が学び合う姿や、学習に対する主体的な取組を見ることができる。

言語活動を通して指導事項を指導することは、新学習指導要領においても引き続き重視されている。古典を扱う授業においても、言語活動を通じた指導を一層意識して取り入れることが求められる。

なお、授業における言語活動を考える際には、以下のような視点をもつ必要がある。

- 言語活動とは、あくまでも各教科等における指導事項を指導するための手立てであり、言語活動を行うこと自体がねらいではない。だから、「言語活動を通して指導する」という言い方がされるのである。国語の学習者の視点から換言すれば、「言語活動を通して言語能力を身に付ける」ということになる。
- 授業に取り入れる言語活動を考える際には、その言語活動が、育成する言語能力を身に付けるのにふさわしいかどうかという視点から検討する。例えば、数時間をかけて展開する大がかりな言語活動も、また、隣の席の者同士で3分で話し合ってみるといった短時間で完結する言語活動も、それが指導のねらいを達成するための、かつ、育成する言語能力を身に付けるのにふさわしい手立てであるのなら、言語活動に要する時間の多寡にかかわらず、そのどちらもが適切な言語活動である。
- 授業で言語活動を行う際には、それがどのような力を身に付けるための言語活動であるのかを、教師が自分で意識するだけでなく、生徒にも意識させることが大切である。両者がこの点を明確に意識することが、「活動はあるが指導はなかった」という教師の自省や、「何のためにその言語活動をやっているのかが分からなかった」などという生徒の不満に対処する手立てとなる。
- 学習の評価においては、言語活動ができているかどうかを表面的に評価するのではなく、身に付けさせたい言語能力が身に付いているかどうかを言語活動を通して評価する。

なお、言語活動を取り入れた指導については、「高等学校における教科指導の充実 国語科 新学習指導要領への対応 一言語活動の充実（１）」（H 22 年 3 月 栃木県総合教育センター）や、「高等学校における教科指導の充実 国語科 新学習指導要領への対応 一言語活動の充実（２）」（H 23 年 3 月 栃木県総合教育センター）なども参照されたい。

ウ 文法の学習は、文章の読みを確かなものにしたり深く読み味わったりするために行うこと

文法の学習は、文章の読みを確かなものにしたり深く読み味わったりするために行うものである。生徒にこの認識がないと、生徒にとっての文法の学習とは、おそらく、暗記することだけが目的化した「苦行」でしかない。「文法の学習で得た知識は、文章の読みに生かせるものなのだ」と生徒が実感できるような学習場面を、授業の中に作り出していくことが必要である。

そのためには、まず、文法の学習の必要性の有無を、生徒の実態に応じて適切に判断することから始めなければならない。そして、文法の学習を行うのであれば、授業で取り上げる文法事項をどれにするのか、また、そこで指導した内容を、以後に授業で扱う作品を読む中でどのように生かしていくのかなどを吟味する必要がある。さらに、授業においては、例えば、「文法の知識によって、文章の読みがこのように確かなものになる」、「文法の知識によって、このような読み味わいができる」などというように、「文法の知識は文章の読みに生かせるものなのだ」と生徒が実感できるような学習場面を作るよう、教師が配慮することも欠かせない。

本研究の事例においては、例えば、**事例2**の第2次の和歌を扱った学習場面は、教師とのやりとりを通して、生徒が文法の知識を基にして和歌の解釈を確かなものにしたり、また、和歌の解釈を通して文法の知識をとらえ直したりしていけるように配慮されている。このように、文法の学習においては、闇雲な文法の暗記だけに偏るのではなく、文法の学習と読みの学習とが途切れることなくスパイラルに影響し合うように配慮する必要がある。

このことに関して、新学習指導要領解説国語編「国語総合」、「古典B」で次のように示されている。

〈「国語総合」 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (1)ア(イ)「文語のきまり、訓読のきまりについての事項」より抜粋〉

(イ)文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。

(…略…)

生徒は、古典を読むのに必要な言葉のきまりの基礎的な事項について、中学校で学習している。ここでは、それを踏まえて指導する必要がある。

「文語のきまり」には文語文法のほか、歴史的仮名遣いなども含まれる。特に現代語と異なる古文特有のきまりに重点を置いて、仮名遣いや活用の違い、主な助詞、助動詞などの意味、用法、係り結び、敬語の用法の大体などについて指導し、古文を読むことの学習に役立つようにする。

「訓読」とは、元来中国の文語文である漢文を、国語の文章として読むことである。「訓読のきまり」とは、訓読に必要な返り点、送り仮名、句読点などに関するきまりをいう。これらのきまりについての指導は、教材の訓読に必要な範囲内で適切に行う必要がある。なお、訓読は、おおむね文語文法に沿った読み方をするが、普通の文語文法では扱われない訓読特有の伝統的な読み方もあることに注意する必要がある。

なお、内容の取扱いの(5)のイに示しているように、文語のきまり、訓読のきまりについては、詳細なことにまで及ぶことなく、読むことの指導に即して扱うとする考え方は従前と同様である。したがって、文語のきまりなどを指導するために、例えば、文語文法のみ学習の時間を長期にわたって設けるようなことは望ましくない。漢文の訓読のきまりの指導の場合も、同様である。

(下線は稿者による)

〈「古典B」 4 内容の取扱い (3)「文語文法の指導に関する事項」より抜粋〉

(3) 文語文法の指導は読むことの学習に即して行い、必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにする。

(…略…)

「文語文法の指導は読むことの学習に即して行」うという考え方は従前と同様であり、文語文法の指導は、文章の読みを確かなものにしたり、深く読み味わったりするために行うという原則的な考えをここで明示している。

「必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにする」としたのは、文語文法をある程度まとまった形で学ぶことを通して、一層古典に対する興味・関心を広げ、そのことが読むことの学習にも生かされるよう配慮したものである。そこで、生徒の実態に応じて、そのような学習の必要性の有無を適切に判断するとともに、文語文法の暗記に偏るなど、興味・関心を広げることがを軽視した指導に陥らないような配慮と工夫をする必要がある。

なお、漢文の訓読の指導に際しても、文語文法との関連に注意させる必要がある。

(下線は稿者による)

なお、「古典A」は、「古典等を読んで、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成すること」をねらいとする科目であり、新学習指導要領解説国語編「古典A」で次のように示されている。

〈「古典A」 4 内容の取扱い (2)「「古典A」の指導に当たって全般的に配慮すべき事項」より抜粋〉

(2) 古典を読む楽しさを味わったり、伝統的な言語文化に触れることの意義を理解したりすることを重視し、古典などへの関心を高めるようにする。

「古典を読む楽しさを味わ」うことは、生涯学習を視野に入れて学習する「古典A」において、特に留意すべき事項である。語句や文法、現代語訳の学習のために過度に時間を取られることで、豊かな古典の世界に触れる前に、生徒を古典嫌いにしてしまうことのないよう、教材や指導の方法を工夫し、古典の世界に楽しく触れることができる授業を展開し、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成していく必要がある。(以降、略)

(下線は稿者による)

「古典A」の授業では、読み取りの学習を大切にしつつも、この科目の中心的なねらいが「我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成すること」にあることを踏まえ、科目の特性に合った授業を展開していくことが求められる。

エ 現代語訳を適切に利用すること

書店に行けばいくらでも訳本は手に入るこの時代に、なぜ古典をわざわざ原文で学習するのかと言えば、それは原文からしか学べないものがあるからである。その意味において、原文は尊重されなければならない。

しかし、原文の古典を読むためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならない。そして、その指導を重視し過ぎるあまり、従来多くの古典嫌いを生んできた現状がある。

古典を扱う授業において、教材に関しては、古典の原文のみを取り上げるのではなく、生徒が理解しやすくなるように、生徒の実態に合わせて教材に工夫を凝らすことも必要である。例えば、原文の内容を理解させるには、「原文の現代語訳を与える」、「ポイントとなる箇所のみを現代語訳させ、その他の部分については現代語訳を与える」、「原文をすべて現代語訳させる」などのように様々なやり方がある。本研究の事例においては、例えば、**事例1**では原文（本文）の内容を理解させるために現代語訳を利用した。これは、**事例1**では「うつくし」「らうたし」という古語の語義や意味を理解し、その言葉を切り口にして文章を読み味うことを中心的な指導事項としたためである。このように、生徒の実態や指導のねらいに応じては、生徒に教材を理解しやすくさせるための工夫の一つとして、現代語訳を適切に利用することも考える必要がある。（なお、「適切に」の考え方については、以下の引用の破線参照。）このことに関して、新学習指導要領解説国語編「国語総合」、「古典B」で次のように示されている。

〈「国語総合」 4 内容の取扱い (6)教材に関する事項 「イ 古典の教材」より抜粋〉

イ 古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。また、古典に関連する近代以降の文章を含めること。

古典の教材を理解しやすくするための配慮事項は、従前、「古典」に示していたが、今回の改訂では「国語総合」に示している。

古典の教材としての古文と漢文を理解しやすくし、親しみやすくするためには、学習に際して読みにくい漢字や熟語に読み仮名を付けたり、難解な部分には、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用いたりする配慮が必要となる。言うまでもなく、古典の学習において原文は尊重される必要がある。したがって、例えば現代語訳などを取り上げるにしても、おのずと適切な範囲はあり、原文とのかかわりにおいて取り上げることが大切になる。具体的には、原文と対比できるように現代語訳などを取り上げたり、原文の前後を現代語訳などで補ったり、原文と同一の文種や形態に属する他の文章や作品を現代語訳などで取り上げたりすることなどが考えられる。このように、現代語訳などを活用しつつ、それらを通して、古典そのものに対する興味・関心を広げていくよう配慮することが大切である。

(…略…)

古典を読み味わうためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし、従来その指導を重視し過ぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。そこで、指導においては、古典の原文のみを取り上げるのではなく教材にも工夫を凝らしながら、古人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を実践し、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある。そして、そのような指導を通し

て、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせていくことが大切である。
(下線は稿者による)

〈「古典B」 3 内容 (1)「ア 語句の意味、用法及び文の構造を理解することに関する指導事項」より抜粋〉

ア 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。

(…略…)

言語面での抵抗を少なくし、古典の言葉に対する理解を深めるためには、現代語訳や辞書などを適切に活用したり、現代の言葉と比較対照したりするなどの指導をする必要がある。特に、文章を読む中で、文脈に即して意味や用法を習得させる指導や、書き手の意図や文章中の人物の心情などを、語句を手掛かりに場面や状況の展開からの確に読み取り、作品の理解につなげていく指導を工夫することが大切である。(以後、略)
(下線は稿者による)

なお、「古典A」は、古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読む対象とした科目であり、そこで言う「古典に関連する文章」とは、古典の現代語訳、古典について解説した近代以降の文章や、古典を素材にしたり翻案したりした近代以降の文章などのことである。新学習指導要領解説国語編「古典A」で次のように示されている。

〈「古典A」 2 目標 の解説部分より抜粋〉

古典を読むためには古典についての知識及び技能を確実に身に付けていくことが望まれるところであるが、^{くんこちゅうしやく}訓詁註釈に偏った古典の授業が古典の学習に意義を見いだせない生徒を生まないよう、古典を読む意欲をまず高めることが何よりも大切である。そこで、教材や指導方法を工夫し学習意欲を高める取組の中で、知識及び技能も身に付けさせていくようにする必要がある。

(下線は稿者による)

「古典A」の授業においては、読み取りの学習を大切にしつつも、多様な手段を効果的に用いて、古典の世界に触れさせ、生徒の古典に対する興味・関心を高めていくことが求められる。